

道標

中国文学と私

小野忍

小沢書店

道標 中国文学と私

昭和五十四年二月十五日印刷
昭和五十四年二月二十日発行

著者 小野 忍

発行者 長谷川郁夫

発行所 小沢書店

東京都千代田区富士見二一五―十二
電話（東京）二六三―九二一八（代）

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

製函所 日東工業

道標
目次

中国文学と私 7

I

塩谷先生の学問 31

武田泰淳の追憶 36

岡崎俊夫の思い出 43

竹内好『魯迅』 47

増田渉『魯迅の印象』 49

皇后飯店——目加田誠さんとの出会い 50

楠山正雄さんと池田大伍さん 53

陳舜臣『実録 アヘン戦争』 57

ある日の郭沫若 58

チエコとソ連の旅から 62

II

中国近代文学運動史略 73

中国現代文学の發展——抗戦前後の長編小説

127

茅盾 136

趙樹理小論 169

東北作家駱賓基 177

詩人馮至 183

初期の林語堂 187

林語堂『嵐の中の木の葉』 189

林語堂『当代漢英詞典』 192

魯迅『阿Q正伝』	196
老舍『駱駝祥子』	199

Ⅲ

『金瓶梅』	203
『金瓶梅』の文学	228
『金瓶梅』の邦訳・欧訳	238
『金瓶梅詞話』の翻訳を終えて	247

あとがき	252
初出一覧	254

道標

——中国文学と私

中国文学と私

まず学生時代のことから話を始めます。私は大正十五年に旧制の松山高등학교を卒業、そのまま東京帝国大学文学部支那文学科、いまの東京大学文学部中国文学科に進学して、昭和四年、一九二九年にそこを卒業しました。同じ学科の同期生に増田涉さんと目加田誠さん、一年下に松枝茂夫さんがいました。増田さんは一年上だったのですが、必修の外国語、かれの場合はフランス語の単位を取りそこねたため、卒業が一年遅れて私と同期になったのです。

大学時代の三年間、私は研究室に行ったことがほとんどなく、したがって、いま名前をあげた人たちとも、学生時代にはつきあいがありませんでした。増田さんの顔を見たのは、卒業試験に、「口述試験」がありまして、その順番を待っていたときが最初です。大学時代には、もっぱら高校時代の友人とつきあっていました。

そのころの中国文学科の講義は、主任教授の塩谷温さんの好みもあって、『桃花扇』とか、『西廂記』といった昔の戯曲の講読が中心でしたが、どれもあまりおもしろくなかった。『桃花

扇』や『西廂記』の講義は、『国訳漢文大成』のなかに収められているその注釈以上ではなく、ちがっていたのはセリフの部分を訓読でなく、中国音で読むというだけのことでした。そんなわけで、それらの授業に出るだけは出て、単位も取りましたが、あまり熱心に聴講する気にはなれませんでした。

塩谷さんのほかに中国語の先生として竹田復さんと、もと駐日清国公使館の参事官か何かだった張廷彦さんという方がおられました。竹田さんは「中国語初歩」と『紅樓夢』の講義を受け持ち、張さんは「中国語会話」の入門書を一冊あげたあと、つまり二年目は唐詩をよんで聞かせただけでした。ですから、いくら熱心に聴講しても、それだけでは中国語を修得することはできません。結局、中国文学関係の講義は必修の何単位かを、何単位だったか忘れましたが、必要にして十分なだけ取って、あとはもっぱら、よその学科の講義を聴きに行きました。特に熱心に聴いたのは、大塚保治さんの「美学概論」。これは非常におもしろかった。

大学時代は、このように中国文学をそれほど本気になつて勉強したわけではないのですが、しかし、卒業論文を書かねばならぬということもあって、青木正児さんの、昭和二年に出版された『支那文芸論叢』などは、かなりていねいに読みました。

卒業論文は『空谷香伝奇』について」という題目です。清代の蔣士銓しやうしぜんという詩人のその戯曲を取り上げました。こんなものを選んだのは、なるべく人のやっていないことをやろうという単純な動機からでした。やって後悔しました。さっぱりおもしろくなかった。作者は乾隆時

代の三大詩人の一人に数えられているので、私はそうとう期待して、上野の図書館、いまの国会図書館上野分館へ行って、蔣士銓の文集、『忠雅堂詩集』と『文集』を借りて来たりして、力んだのですが、無駄骨に終わりました。

昭和四年に卒業しましたが、その頃は不景気のどん底で、東京では、就職口がなかなか見つからなかった。ところが、塩谷さんが不肖の弟子の私を、横浜辺の新設の中学に推薦してくださった。在学中先生とはほとんどつきあいがなかったのに、なぜ推薦してくださったのか、理由があるとすれば、「口述試験」のとき、私が先生にとって意外にも、いくらかまともな答えをしたからではないかと思っています。

「在学中はあまりお目にかかりませんでしたな」というのが、塩谷さんの「口述試験」の第一声でした。それから二つ、三つ御質問がありました。その中で、いまでも覚えているのは、王勃^{わうはく}の詩「滕王閣」^{とうおうかく}についての御質問です。それを毛筆で紙に書いたのをお出しになって、「これを読んでごらん下さい」と、おっしゃった。これはすらすらと読めました。読めましたというのは、それが出ることを一番バッターが帰って来て、みなに教えたからです。それに詩の内容も別に難しくない。「詩体は何ですか」というのが次の御質問。「七言古詩です」と答えると、「なぜ七言古詩ですか」。私は困って「七言古詩と覚えています」。

先生は呆れたような顔をされて、詩についての御質問はそれで終わり。次に『北曲』と『南

曲』はどう違いますか」。

なんと答えたか忘れたが、それくらいのことは、青木さんの本などによって知っていたので、わりあいくわしく答えました。

すると、塩谷さんはちょっと意外なような顔をされました。

塩谷さんが推薦してくださった中学は、のちに日本大学の付属中学になりましたが、推薦状を書いていただいて、まず日本大学の、たしか心理学の教授のところへ行き、それからその教授に紹介されて、くだんの中学の校長、代議士でしたが、に会い、採用ということになったらしいが、校舎がまだ半分しかできていませんでした。これから生徒募集をするというわけなのです。その上、集まった教員のなかに柄のわるそうなのが二、三人いる。そんなことでやめることにしました。

そこで、塩谷さんのところへ行って、辞退したい旨を申し上げると、いささか失望したような顔をされましたが、それでも、「どうしますかね……」。付属図書館にポストが一つあるんですがね」とおっしゃった。「何をするのでしょうか」とお尋ねすると、「漢籍の整理です」。

あとでわかったことですが、それは東大へ寄贈された紀州の南葵文庫の本の整理でした。私はそのころ、漢籍をいじるのがなんとなくいやになっていたので、「ちょっと考えさせてください」と言ったか、あるいは婉曲にお断りしたか、文句は覚えていませんが、二つ返事で承知することはしませんでした。若気の至りですが、結局付属図書館にも行かず、卒業すなわち失

業ということになりました。

それでは、いったい何をしていたかというと、教科書の編集の仕事を引き受けたり、翻訳をやったり、一時は家庭教師をしたりが多角経営で、そんな状態が数年続きました。

私の最初の「業績」は、フロイド・デルという、日本でもその作品が翻訳されていくらか知られていたアメリカの作家の書いたアプトン・シンクレアの伝記の翻訳です。これは私が大学を卒業した翌年に本になりました。その前後の事情をお話ししておきましょう。

本郷通りの赤門前から本郷三丁目の方へ行く道の左側に、たしか昭和書房といった屋号の洋書の輸入販売店がありました。通りがかりに、ときどき寄っていましたが、そこで偶然この本を見つけたのです。

そのころ、アプトン・シンクレアの作品は、日本では大はやりにはやっていまして、私も読みあさっていました。そこで、フロイド・デルの著書をさっそく買って来て読んでみると、たいへんおもしろい。内容も充実しているし、叙述も著者が作家であるだけに上手です。これはいけるというわけで、人を介して、先進社という出版社、もと改造社の編集部にいた人が独立して始めた出版社に持ち込んで、訳稿の出版を引き受けてもらいました。

その訳本は三千部か五千部刷って、一度に印税をもらいましたから、失業中の貧乏書生は多少いい気になって、翻訳の材料をさがしかたがた、その後一時アメリカ文学を読みあさりまし

た。

一方、中国文学とは縁が切れた形になっていましたが、『ニュー・マッセズ』という左翼文学雑誌が、当時ニューヨークで出ていまして、その雑誌にアグネス・スメドレーが毎号のように中国通信を寄せていました。そのころはそれを読んでも、内容を的確につかむことはできなかったのですが、あとで考えると、それはスメドレーが中国の「ソヴェト区」を訪れて、その見聞を書いたものでした。非常に美しい文章で、私はスメドレーという人がどういふ人か知りませんでした。その文章にひかれて、毎号読んでいました。大学卒業後の数年間、中国文学と私とのつながりはその程度でした。

いろいろなことがありましたが、数年間多角経営に追いまくられたのち、昭和九年、一九三四年二月、富山房という出版社、そのころは平凡社と並んで、百科辞典出版の大手でしたが、そこに百科辞典の編集部員として入れてもらいました。

編集主任は楠山正雄さんでした。私は筆記試験を受けたのち、何日何時に出頭するようにという通知をもらい、そこで会ったのが楠山さんでしたが、それが楠山さんだとわかったのは、入社がきまって、入社してから何日かのちのことでした。最初は品のいい小柄な人という印象でした。はじめてその人に会ったとき二、三質問されたのち、給料は最低いくら望むかと言われて、返事に困った。楠山さんだとわかっていたら、そのイブセンの戯曲などの訳書や、『近

代劇十二講』などの著書を高校時代むさぼり読んだことがあるので、返事のしようがあったのですが、虚を衝かれた形になって、かけ値なしの最低額を提示したところ、最初受け取った月給袋には、その最低額の六十円しかはいつていなかった。いくらか色をつけてもらえらうと期待していたのですが、あとの祭りです。もともと、独身者の初任給としては、それが相場だったのかもしれない。

それはさておき、百科辞典の編集にたずさわると、私は中国文学の専門家として扱われる。日本では出身学科によって、人の専門を頭からきめてしまう習慣がある。私の場合も例外ではありませんでした。

かくて、また中国文学の研究を始める羽目になりました。そのときたまたま読んだのが、郭沫若の『中国古代社会研究』です。これは藤枝丈夫さんの訳文と照合しながら、相当ていねいに読みました。

富山房の『国民百科辞典』に郭沫若の書いた「周易」が載っていますが、これは郭沫若が社の近くの神田の学士会館で、「易について」講演するということを新聞か何かで知り、私と先輩の同僚とがそこへ出向いて執筆を依頼したものです。なかなか独創的な労作で、のち、これが発展して『思想』に載った「易の構成時代」になりました。その講演会を主催したのが、竹内好さんたちの「中国文学研究会」でした。「中国文学研究会」の存在を知ったのは、そのときが最初です。

中国文学の研究をまた始めた申しましたが、この時期に読んだのは郭沫若の『中国古代社会研究』に始まって、中国やヨーロッパの中国古代史学者の著作で、カールグレンの『左伝真偽考』の私の翻訳は、その延長線上のものです。

ところが、百科辞典の編集は私の場合、たいへん忙しい仕事でして、三、四箇月ごとに印刷工場へ出張校正に出かけなければならない。それが一日や二日ではない。出張校正はひと月上続くのです。

というのは、ちょうどそのころ、平凡社が百科辞典を月刊で出しはじめた。平凡社がそんな急テンポで出さなければ、こちらは一年に二冊ぐらいのペースでやれたのが、そういうわけにいかなくなった。社長がある日、編集室にやって来て、「こういうことになった以上、一年に四冊ぐらい出してもらわないと困る」と、言い出したのです。たいへんなことになったわけですが、結局、結果としては一年に四冊出すことは無理で、三冊ぐらいしか出せませんでした。被害は私個人にも及んで、時間をかけて蓄積して行かなければならないような研究は、できなくなつた。結局、研究はあきらめざるをえなくなつたのです。

そのころ、「中国文学研究会」の同人たち、竹内好さんや武田泰淳さんを、増田さんと松枝さんを介して知り、竹内好さんが私を訪ねて、富山房に來たりした。

あの人は記録癖があつて、たんねんに日記をつけているほかに、人からもらった名刺は全部スクラップ・ブックに貼っているらしい。喬冠華がクローズ・アップされたとき、そのスクラ